

吉良先生との思い出つれづれ

滋賀県立琵琶湖博物館 草 加 伸 吾

私が先生と親しく交流させていただくようになったのは、この10年ほどでした。私が、1981年に大阪市立大学の大学院に入った半年後には先生は琵琶湖研究所を創るために滋賀県に移って行かれました。その後、縁あって私も滋賀県立琵琶湖博物館の設立に関わることとなり、同じ滋賀県の先生のお近くで、仕事をするようになりました。2001年春、滋賀県北部の金糞岳より流れる草野川上流にご案内した折、モンゴルでの調査に誘っていただき、「琵琶湖―フブスグル湖交流協会」の調査に私も参加することになりました。なんでも、モンゴル北部には青い宝石とよばれるフブスグル湖という古代湖があり、琵琶湖と地形形成がよく似ているそうです。その湖の水位が最近上昇して村が水没する恐れがあるので、調べているということでした。2001年に同行した夏の調査では、考えられる原因として、温暖化により氷河や凍土からの流入量が増加したこと、またフブスグル湖出口付近に流入している荒れた流域が土石を供給して次第に出口をせき止めて、水位が上昇していることなどが、現地調査により次第に分かってきました。これは、かつて琵琶湖から流出する瀬田川にそそぐ大戸川が、荒廃した田上山地から土砂を供給して湖をせき止め、洪水になったのと同様の状況でした。過去ソビエト時代にも何度か浚渫したとの聞き取り記録があることから、これまでも、水位上昇が起っていたのかもしれませんが。いずれにせよ、その時の調査がきっかけで、私は当時

広く発生していた山火事跡地の更新が非常に悪いことに驚き、原因調査を始めました。それ以降、最初の調査を含めて2001～2006年に4回ほど、先生とご一緒することができました。

2002年、2回目の同行の際には、マイマイガ、カレハガなど蛾の大発生にも遭遇し、沢山の木々が葉を食害され、枯損する仕組みを調べました。翌年には南向きの岩の上に吐き出されて、雪のように真っ白に降り積もった糸の上に、無数の幼虫が盛り上がり立ち上がるような形に集まっているのを見つけ写真に撮ってられました。これは風によって周囲の森林に散布され拡がるのが推察されるとのことでした。ご高齢にもかかわらず、先生は非常に精力的に歩かれ、同行者に色々な場



図1. ハトガル、ガンバキャンプにて、通訳ガンバ氏の両親と歓談中（2003年8月）。

所で解説をしてくださいました。例えば、アースハンモックやソルノピョークについて、礫原の成因について、また南面北面の植生の違い、あるいは転がり植物や様々な湿原植物について説明してくださいました。それら自然現象の不思議さを、情熱をもって、淡々としかも楽しそうに話しておられたことが思い出されます。今になって思えば、これは先生が20代の初め、今西錦司隊長のもとで同僚たちとともに大興安嶺探検の現場で培ってこられた知識であったのかと思われます。

大興安嶺で探検した地域と今回のモンゴル北部フブスグル湖流域は、緯度が北緯約50～53度の間にあり、ほとんど同じで経度だけモンゴルの方が20～23度ほど西にずれており、ともにシベリアタイガの南端で永久凍土が発達し、種類は異なるもののカラマツが優占し、ステップと森林ステップ、そして森林で構成されています。また両者の共通点は、花の種類が多いことで、日本では絶滅危惧種になっているオキナグサをはじめとする様々な草花が短い夏の間、入れ替わり立ち替わり咲くので、植物のお好きな先生にはこたえられなかった



図2. フブスグル湖西岸、ドルーン半島付け根にて、シベリアカラマツ倒木の根張りをバックに（2002年8月）。

のでしょう。同好の方たちを誘って案内されたり、実に晩年は、2007年まで毎年という位、モンゴルへ出かけておられました。一方、両者には異なるところもあり、凍土の深さや、木の成長具合、太さ、さらに森林限界の高さなど、まだ論理的に説明できていないこういった違いにも、興味をもたれたのではないのでしょうか。

私が2006年度～2007年度まで、琵琶湖環境科学研究センターに兼務で行っていた折、毎週火曜日に先生もいらしておられ、時々昼食がてら楽しくお話ししました。よく話題になったのがモンゴルの七不思議で、（人によって異なる色々な七不思議がありますが）例えば、同じ緯度にもかかわらず、大興安嶺では、1,000mほどまでがダフリアカラマツで、その上にハイマツ帯があり、1,200mの頂上付近になると、もうハナゴケの生える岩礫地帯になっているのに対し、フブスグル湖周辺では、2,300m付近までシベリアカラマツの森林限界が高く上がっていること、またシラカンバがこの流域では全く見られないこと、トウヒが岩礫斜面に分布していること、こちらではめったにアブ、ヌカカ等に襲われないこと、湖下流の堆積地形が地滑りによってかなり昔に形成された可能性があること、そしてカラマツ帝国といわれるほど圧倒的にシベリアカラマツが優先している点など、不思議と思われる現象を次々挙げられ、興味が尽きないご様子で、とても熱心に話しておられました。

先生は、奥様がパーキンソン病で体調を崩されてから、2年間ご自宅で看病され、奥様をご入院なさってから毎週お顔を見に、通っておられました。それよりずっと、ご自身がお病気で倒れるまで、親しいヘルパーの方や親戚の方に入ってもらっていましたが、家のことは買い物からゴミの分別までほとんどご自分でなされ、その間にも著作集出版のための仕事を続けられました。晩

年，奈良春日山や，大阪府私市の植物園に同行した折，「この頃，自然の景色を見るとますます鮮やかに，美しく見えて仕方がない」としみじみとしたご様子で言っておられた言葉に，先生の深い自然観が凝縮して感じられました。しかしその時

先生がなぜそのような言われたのか，私には理解できず不思議でありながら，とても強く印象深く感じたことが忘れられません。

先生のご冥福をお祈りいたします。

